



^ 13  
2906  
18



門 へ 13  
號 2906  
卷 18

昭和九年  
七月五日  
購求

春曉八幡佳年六編卷之下

明治十五年

江戸

鳥永春水作

策卅五回

春曉の晴く雨和み年の刻まき新飯の格振が務手小洗ひ  
うけてあり素の古の指子うら介西成海めて退屈の嘆きを  
陳家の家の初見をゆけ 多く遊見さん 吾何ぞお後さ  
ごまへ。牙利ふゆ空お其チヨおいまお其之様いん子へんを  
指子のあうう出で初見のおく存る葉子と結ぶか

初思へまことも不持しま子こを引込ひ不ふかかるる 抽ひすす申ましし 香かくく之之 松しょう  
とといい 勸かんん ざざ子こ 母ははのの 人ひとのの おお 齊せい 中ちゆうとと おお 葉え 子このの 粉こな ざざりり けけ んん 放はな  
とといい 抽ひすす ままんん 些さ おお 送お 入い けけ 放はなすす

作者曰く此は又の葉産れ之味味の味味の味味連るの味

の婦人を身より兼上の女成りておあり大男成りてお  
して血通るべきも婦人といふと別け上りたる事  
りふみりあやぶまとも有官の先刻の義知あらし  
男はの女と婦人といふは穢し中の中の事ななり

お前まへををんんおお一ひと人ひと久くわ 抽ひすす 母はは人ひとのの 居ゐまますす 白しろ 若わか 湯ゆ ささええ 私わたしよよ 白しろトト

抱だはは成な給たま味あじををよようううう 女メ五ご 下したへへおおろろままとと 意い業ぎふぞぞうう けけりり

まませせへへ 抽ひすす 白しろ 三さん 昨きのう 目め 由よし 之これ 久くわ 私わたしのの 尾お にに おお 入い りり けけ 且かつ 是こゝろ 由よし 温ぬる

順つへへ てて ちち むむ 在あ りり まま すす 一ひと 味あじ 小こ 可か 愛あ りり ぬぬ 成な 給たま 子こ 入い けけ んん 放はなすす

おお 送お 入い トト 之これ 尺しゃく のの 口くち をを ぬぬ けけ 女メ 入い けけ 抽ひすす 角かく 青あいい 緑ろく のの 斤じん 骨こつ 入い けけ んん 放はなすす

のの 小こ がが ぬぬ けけ んん 放はなすす 由よし 縁ゆかり ささ とと 熱あつ うう ちち むむ まま せせ 抽ひすす 二ふた 穢け んん 放はなすす

とといい ますす 白しろ せせ 一ひと けけ まま 漸あ りり けけ 遠とほ くく 産う 所ところ とと 上かみ 下しも ちち むむ ああ りり ぬぬ 成な 給たま







後身ナ新が氣を付て上まもヨ 侍ハイ五ヶ年

まを。そを由かあさんの猶小使もあつて

ひたひたすヨ 侍ハイ五箇年

私に傍々お長を放る。又入遊さん二子で

之わがり意より亦面の方を遊せ又ち

くさの可也極る五遊ハ長も又ち

欠出りあつかはぬハ此小使成格を

とありちくの自は其ふも老まる世の中の  
定むる長は海くまをも考へ格めて不  
付てまよふ後悔まる凡夫の老をわく  
既小買をくかむむまそとまそ生の  
かろくや家柄の財ふり一とを定めて  
おとまの海を越く此世は去り身も  
子の悪徳のくまくと名ひれり  
ある新乳衣の衣更と若う

付くも奈何不せしと胸よこころ目よりうめし涙ハ母の情なり  
下 柿 小夜を寝て。こまきおのふ下いぢもあはれ  
しと抱きあふ 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
てあを元は居てつけかき 笑めあはれあはれ  
云く二匹のふ後けしあてヨ志事 下いぢもあはれ  
運入 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
うさつろく 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
て大ねよ此を返しよ 母 今んたの雑巾と借てかきまき

老年ても未耳ハ大丈夫と 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
おき小来てうふそし 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
目利よわくううと息よ猪子元とは舞うけて粘付物を  
仕て裏に小居とごうう何由か 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
か此をとりてのどをさし悔しきふ出 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
とりののお前がなれとヨトリひるが 乾る雑巾とゆめ  
来り 母 今んたの雑巾と借てかきまき  
中殿のとき多智て干す 母 今んたの雑巾と借てかきまき



フホシ 他人ひとは小使こし成なりて平ひら氣きで居ゐるヨ侍し上じやう温ぬる頓どんが  
フ私わたしの志こころ見みゆまう今いまは住すみああるわわ母はは上じやうままごごとと  
ぐぐああの大おほききささふふああるるののへへ修しゆ程ぢやうアアああるるヨヨそそ直ちよく入いるるののぐぐはは見みのの  
衣ぎ袈げハハ濡ぬれれアアああるるののうう 柿かきハハ今いまアアんんははいいぢぢももははももああるるけけ  
ハハああののヨヨ母ははハハ上じやうままごごとと小こ使しぢぢてて可か笑わらのの之これ下した母はは子こ二ふた人にんがが  
性せうとと他たのの思おもひひままををゆゆららふふあありりのの人ひとのの氣き持もちももよよくく生なまま  
居ゐ別べつ深ふかねねどど元もと人ひとのの心こころ易やすくくもも入いつつどどよよ向むかへへるる娘むすめがが樂たのしし  
司つかさどややおお梅うめええ何なに時ときもも思おもははるるおお梅うめはは元もととといいふふ合あひひ合あひひ

第廿六回



お一いち番ばん 對客たいかく席せきはは不ふ在ざい友とも達だつ同どう志しみみるる千ち織ぢもも恋こひトトるる社しゃ裁ざいはは  
ももととののいいふふああららむむととああははれれのの用もちひひのの分ぶん拵ぢびびググ七しち分ぶん自みづかららああるる可か笑わらとと  
考かん實じつななおお終しゆのの用もちひひのの分ぶん拵ぢびびググ七しち分ぶん自みづかららああるる可か笑わらとと  
童どう戲ぎのの所ところががいい連れん中ちゆうのの氣き質しつふふ一いち七しち面めん白はく一いち  
そそももくく嬰えい女にょ掃そう閑かんのの客きやくもも出で動どうせせもも浮うききああるるふふささもも面めん白はく  
化くわ見みるるああのの美み茨いば一いちきき物ものももああるるままもも物ものももああるるままもも物ものももああるるままもも  
常じやうとと梅うめもも公こうのの庭にわままよよららととああるる活かつ葉えつととああるるああるるああるる

おののびがうまの気晴しふむらびとてはあれ場あり  
あまね こと つら まるき せき こと ちやう こと こと  
おれ こと こと こと こと こと こと こと こと  
ききおの用ひるけは席よりの人ものからぬ風  
情とあつて傍へ一例の中取あまてお別れの老  
史同安七八人清元の間にて

おののびがうまの気晴しふむらびとてはあれ場あり  
あまね こと つら まるき せき こと ちやう こと こと  
おれ こと こと こと こと こと こと こと こと  
ききおの用ひるけは席よりの人ものからぬ風  
情とあつて傍へ一例の中取あまてお別れの老  
史同安七八人清元の間にて

おののびがうまの気晴しふむらびとてはあれ場あり  
あまね こと つら まるき せき こと ちやう こと こと  
おれ こと こと こと こと こと こと こと こと  
ききおの用ひるけは席よりの人ものからぬ風  
情とあつて傍へ一例の中取あまてお別れの老  
史同安七八人清元の間にて

他者曰今一人の由のさんとあつたのうとらふこと

志にお遊入梅香の西へ来る途中乳香女の笑  
と云ふは小児と抱来りて梅香ふ又する夕方のありけり  
又梅と六福をき所は住居とも言目程むことつふ  
して遠方へ去ると思とひ未降る夕方のて再聊かせざ  
る由へは夕方の隠るく他人よ不意珠子彼三と云理  
深きひるまきば自中ふ家子ふ由をさぐりてせし  
かりまきぐいし一隠の者ふわ所の人様よ状子思成  
の意候もまよふくまむか笑へて

梅 ちか  
おの今夕このご可慮らし小児ごらう子ト抱  
居る子とさし出せし表不居るゆへ小児の癖垂ふも成出  
しつか樂子抱る ちか  
多し又へおし 梅 ちか  
隣近にお神 ちか  
ちか  
あつま 梅 ちか  
よ夕夕 梅 ちか





まると世とまるうと 秀へし 申さん 困るや おは露ろ石女とす  
とねへ 榮へ 何れも好男のそねますとるテ 秀へ 申さん 女はゆえ  
返らまるとのが好男うへ 申ト 強くしてとるんごま申さん  
後のがまけまるとか思ひあへた私が 情合子やうの上  
まうとちやるあへり 由へい 怒り 申さん 女房にやうと居ますう  
あへ 申へ お怒るといふ男女のふ女房にやうと居ますう  
と云のう 由へい 申さん 方根りの解でい 申へ 申さん 何れ  
今貝へお前とのう言が 出来扱へ申り ぬるりて 情合のせ

秀へ 情合ふやうと 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
さうおめとあへり 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
申へ 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
所へ 情集まるといふところよ 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
居て 大筆の筆の 情合の何れ申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
左根ごうけの 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん  
申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん 申さん







此一とのと信濃の玉の字和清のおんて為永吉英とよしの  
此一と怪清が一虫勝らんまよやく三孝さんお前を長狂訓の  
のまておまのうさぞ面白うらうま 妻とく化者も也  
ひの舟形善をほまらるゝのサ左松云申おも人情本の元  
祖とて此を狂訓まらう化者不誅よ否るを父でモウ年  
齡も二百二十をわうらうらう流りよおまてお前らうら  
人ぶら子 新へそまに能が何ぞ言夜が文をうふせらる淋く  
まらうお一怪清とらへおおで気味が悪くまらうまらうまらう

此一由 一書三の能いもまらうまらうまらうまらうまらう  
まらうまらう何ぞ代ておまのう 書ア 狂者もまらうまらう  
何ぞ代てまらうのうとりあ成安居る 一個の明女うらう  
判の狂者病の弱言とりあがまらうまらう 一ト私や小使  
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう  
一書八さんおゆる 書ア 狂者今住くまらうまらう 一五私  
うまらうまらうまらう 一個でまらうまらうまらうまらうまらう  
一書一 一書のまらうまらうまらう 一書一 一書一 一書一 一書一

しから物まゝして しる 一 ま 二 ま 三 ま 四 ま 五 ま 六 ま 七 ま 八 ま 九 ま 十 ま 十一 ま 十二 ま 十三 ま 十四 ま 十五 ま 十六 ま 十七 ま 十八 ま 十九 ま 二十 ま 二十一 ま 二十二 ま 二十三 ま 二十四 ま 二十五 ま 二十六 ま 二十七 ま 二十八 ま 二十九 ま 三十 ま 三十一 ま 三十二 ま 三十三 ま 三十四 ま 三十五 ま 三十六 ま 三十七 ま 三十八 ま 三十九 ま 四十 ま 四十一 ま 四十二 ま 四十三 ま 四十四 ま 四十五 ま 四十六 ま 四十七 ま 四十八 ま 四十九 ま 五十 ま 五十一 ま 五十二 ま 五十三 ま 五十四 ま 五十五 ま 五十六 ま 五十七 ま 五十八 ま 五十九 ま 六十 ま 六十一 ま 六十二 ま 六十三 ま 六十四 ま 六十五 ま 六十六 ま 六十七 ま 六十八 ま 六十九 ま 七十 ま 七十一 ま 七十二 ま 七十三 ま 七十四 ま 七十五 ま 七十六 ま 七十七 ま 七十八 ま 七十九 ま 八十 ま 八十一 ま 八十二 ま 八十三 ま 八十四 ま 八十五 ま 八十六 ま 八十七 ま 八十八 ま 八十九 ま 九十 ま 九十一 ま 九十二 ま 九十三 ま 九十四 ま 九十五 ま 九十六 ま 九十七 ま 九十八 ま 九十九 ま 一百 ま

しから物まゝして しる 一 ま 二 ま 三 ま 四 ま 五 ま 六 ま 七 ま 八 ま 九 ま 十 ま 十一 ま 十二 ま 十三 ま 十四 ま 十五 ま 十六 ま 十七 ま 十八 ま 十九 ま 二十 ま 二十一 ま 二十二 ま 二十三 ま 二十四 ま 二十五 ま 二十六 ま 二十七 ま 二十八 ま 二十九 ま 三十 ま 三十一 ま 三十二 ま 三十三 ま 三十四 ま 三十五 ま 三十六 ま 三十七 ま 三十八 ま 三十九 ま 四十 ま 四十一 ま 四十二 ま 四十三 ま 四十四 ま 四十五 ま 四十六 ま 四十七 ま 四十八 ま 四十九 ま 五十 ま 五十一 ま 五十二 ま 五十三 ま 五十四 ま 五十五 ま 五十六 ま 五十七 ま 五十八 ま 五十九 ま 六十 ま 六十一 ま 六十二 ま 六十三 ま 六十四 ま 六十五 ま 六十六 ま 六十七 ま 六十八 ま 六十九 ま 七十 ま 七十一 ま 七十二 ま 七十三 ま 七十四 ま 七十五 ま 七十六 ま 七十七 ま 七十八 ま 七十九 ま 八十 ま 八十一 ま 八十二 ま 八十三 ま 八十四 ま 八十五 ま 八十六 ま 八十七 ま 八十八 ま 八十九 ま 九十 ま 九十一 ま 九十二 ま 九十三 ま 九十四 ま 九十五 ま 九十六 ま 九十七 ま 九十八 ま 九十九 ま 一百 ま

一様とのおこりまらう。遊美のごとおひのさそひらう。

おひのさそひらう。先刻秀八さんぬ栲苴さんか

おひのさそひらう。今おひのさそひらう。先刻秀八さんぬ栲苴さんか

おひのさそひらう。行を任せ仲まゝ弱音さんぬ栲苴さんの時

おひのさそひらう。いゝぢやあ居るふらうて栲苴さんと遊美

おひのさそひらう。ごめいごめいごめいごめいごめいごめい

おひのさそひらう。け事先ごめい栲苴さんの再勅ハワットりのねの大ぬいご

おひのさそひらう。らうあう一弱音さんぬ栲苴さんと名を改くはしまたまはれり

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。あせく。

げんめ をのめ 評判よく やまらう 派の か 派の か 派の か  
 奥女の をのめ 派の か 派の か 派の か  
 秀八と藤崎よせど か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 大切 か させ か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 重成 か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 とお夕よ か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 柳若い か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 女の か 柳若い か 柳若い か 柳若い か  
 血縁の か 柳若い か 柳若い か 柳若い か

七  
 柳若い

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

